

## JP 日本語版 — 囁く森 (The Whispering Forest)

山々の奥深く、地図が途切れ、風が古の秘密をささやく場所に、若き探検家 ライラ (Lyra) が忘れられた道を進んでいた。

彼女は月光の下で囁く森の伝説を聞いたことがあった——光で語り合う木々の森。そこへ入った者は、明確な記憶ではなく、夢だけを持ち帰るという。

祖母から受け継いだ古い護符と好奇心に導かれ、ライラは苔に覆われた石のアーチをくぐった。

その瞬間、森が息を吹き返した。

枝の間に光の糸が漂い、蛍のように彼女の名を呼ぶ。

「——ようこそ、探す者よ...」

どこからともなく、しかしすべての方向から声が響いた。

葉が金と翠に輝き、風と共に模様が変化する。

森は謎を通して語りかけた。

それを解かねば、前へ進むことはできない。

最初の木が問いかけた。

「心が求めながらも見えぬものは何だ？」

ライラは考え、答えた。

「富ではなく...目的です。」

木はやさしく光り、輝く種を落とした。

さらに進むと、檜の木々が彼女を囲んだ。

樹皮の上に次の謎が光った。

「分け与えても減らぬものは何？」

ライラは微笑み、言った。

「知識、あるいは希望。」

地面が震え、青い光の道が開かれた。

広場の中心には、静かな池の上に石が浮かんでいた。

その中には、暁の秘宝 (Artifact of Dawn) が輝いている。

手を伸ばす前に、最後の囁きが響いた。

「森の恩恵を受けるなら、その重みも背負う覚悟はあるか？」

ライラは目を閉じ、静かに言った。

「はい、受け入れます。」

すると根が彼女を優しく包み、石は光となって護符に溶け込んだ。

森は静まり、風が感謝を伝えるようにそよいだ。

それ以来、ライラはただの探検家ではなくなった。

彼女は――

**囁く森の守護者** となり、

地と光の狭間を旅する者として、満月の夜ごとに語り継がれている。